62 《月桂樹文硝子花瓶》

61 南満洲鉄道株式会社窯業試験工場
《赤被せ硝子花文花盛器》 一点
大正十四年（一九二五） ガラス
径三八・五、高九・九

62 南満洲硝子株式会社《月桂樹文硝子花瓶》 一対
昭和七年（一九三二） ガラス
各径二二・一、高三六・〇

63 《硝子花盛器・蝋燭立》 三点
昭和五年（一九三〇） ガラス
花盛器：径三〇・二、高一一・五 蝋燭立：径一八・〇、高二三・二

作品番号61《赤被せ硝子花文花盛器》は、大正十四年（一九二五）五月の皇太子（昭和天皇）の京都行啓の際、南満洲鉄道株式会社社長・安広伴一郎より献上されたもので、同社の窯業試験工場で制作されたとみられる。三脚の猫足がつく浅めの鉢で、無色の透明ガラスに乳白色とその上から金赤ガラスを被せ、花文様をカットで表している。無色の透明ガラスまでカットすることによって、金赤ガラスの下から白色ガラスの層が表れ、縁取りのような効果をみせている。満鉄窯業試験工場の貴重な作例と推測されるが、猫足の不定形な形状や口縁部の歪み、カットの技術など、まだ技術的に洗練されていない部分が多いことがわかる。

作品番号62《月桂樹文硝子花瓶》は、無色の透明ガラスの一対の花瓶の四方に、月桂樹の文様をグラヴュールで彫り表した作品である。昭和七年（一九三二）に関東長官・山岡萬之助より昭和天皇へ献上された。作者を示す資料は残っていないが、この伝来から、関東州大連市で活動していた南満洲硝子株式会社の製品であると推測される。

作品番号63《硝子花盛器・蝋燭立》は、昭和五年十一月の昭和天皇の岡山県下行幸の際、途中でご一泊された名古屋において名古屋市長・大岩勇夫より献上された品である。底部に深くカットをほどこした無色の透明ガラスの花盛器と、オレンジ色の透明ガラスを被せて切子をほどこした受皿が付いた燭台で、洋風のデザインであるが日本製、あるいは満鉄製のガラス製品であると推測される。伝来によれば、献上当初は一尺二寸の切子盆が付属していた。

61 《赤被せ硝子花文花盛器》

63 《硝子花盛器・蝋燭立》

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ ―光と影の造型美
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 70

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan